～つながる県南　広がる実践　すべては子どもたちのために～

県南教育事務所
教　育　情　報

南風 nanpu

令和８年２月９日（月）
No. 17【 通巻 第 257 号 】
文責 ： 教務課指導班

令和7年度指導教諭による「授業力アップ講座」⑦

今号では、12月26日に行われた授業力アップ講座（特別支援教育）を紹介します。

12月26日（木） 一関市立南小学校
特別支援学級 生活単元学習 自立活動
「カレンダーをつくろう」

授業者 佐藤 貴子 先生

佐藤先生の授業から学ぶ

特別な支援を要する児童への指導のポイント！

- 児童一人ひとりの実態や課題に応じためあてを立てて、達成できたかを振り返ること。
- 明確な手順、約束の積み重ねで、児童が安心して授業に取り組めること。
- 「雑談」の中から様々な情報をキャッチすること。

提案授業

授業動画の視聴を通して研修を行いました。授業では、それぞれの障がい種に応じた指導のねらいを設定し、児童一人ひとりの特性や実態に応じて取り組み方を調整した「カレンダーづくり」の学習が実践されていました。

児童の得意を生かし、塗り絵・折り紙・パソコン操作など多様な方法で制作が進められていました。「カレンダーづくり」は毎月同一の手順で実施されていること、学習のルールを積み重ねることで、児童が見通しをもち、安心して学習に参加できるよう工夫されていました。また、授業の導入で実態把握に基づく個別の目標設定を行い、終末には振り返りを実施することで、児童が自らの学びを実感し、互いの努力を認め合う時間が確保されていました。さらに、12 月のイメージを事前に共有するなど、活動内容を理解しやすくする手立ても講じられており、児童が達成感を味わうとともに、主体的な参加を促していました。使用する材料や道具なども同じ手順、同じ場所に準備されており、児童が安心して学習に取り組む姿が見られた授業でした。

研究協議

佐藤先生から「雑談の中から情報をキャッチすることの大切さ」についてお話がありました。朝のちょっとした会話から子どもの機嫌や心の動きを感じ取ること、また、１日の中で変化する気持ちを丁寧に拾っていくことを意識しているとのことでした。「雑談」は単なる会話ではなく、子どもが 「自分で選び、決める」ための大切な情報源であること。主役は常に子どもであり、そのために必要な情報を集め、アセスメントにつなげていくという姿勢が共有されました。

また、活動がうまく進まなくても、次の時間に向けて教材や環境のバリエーションを変えたり、選択肢を準備したりすることで、子どもが自分の気持ちを安心して表出できる場をつくることができる、などの工夫も話題になりました。

個々の課題に応じた活動の設定や、子どもに合わせた言葉がけ、手順のパターン化による安心感の提供など、日々の実践に生かせる多くの示唆が得られました。

参加者の声（一部抜粋）

- 日々の雑談・対話を通じたアセスメントと信頼関係の構築が授業運営の基盤であると感じた。
- 児童に選択や決定を委ねる仕組み、活動のパターン化と十分な事前準備が、安心して学べる環境づくりに有効だと感じた。
- 最低限のルール設定・クールダウン環境の確保・座席配置の工夫・教材の個別化・支援体制の整備など、即時的な手立てが豊富であった。

Q&A 研究協議の中で出された参加者の先生方から出された悩みや困りごと

Q1 **幅広い学年・実態の児童に対応する授業づくりの工夫について教えてください。**

A　個別や学年別の対応だけでなく、同じ題材に取り組みながらも条件や教材を変えることで個々のねらいを達成できるような工夫をしています。ペアやグループでの学習、自分で進められるプリント学習を取り入れることで、個別に対応する時間も確保しています。

Q２ **学習に取り組まない子、教室を抜け出す子への対応はどうしていますか？**

A　子どもによって理由やきっかけ、うまくいく方法が違います。子どもと相談して、子どもも納得できる最低限の約束を決めています。「やらない」と言うかもしれませんが、「やる前提で」どうしたらできるか考え、子ども自身が決められるようにします。周りの子どもにも、その子の気持ちや、その時の状況を伝え、違いを理解し尊重し合えるようにしています。